

五山僧と温泉

*武穎（名古屋大学・人文学研究科）

1. はじめに

現在の温泉地は、古くは湯治の場所として、病気の療養と健康回復を図るために訪れられていた。古代の湯治について、『風土記』や『日本書紀』などの史書からも見られ、中世には、湯治も公家、武家、僧侶などの階層に広がっていた。中世五山僧らも、湯治をよく行い、関連記録を残した。本発表は、五山僧、特に景徐周麟という一禅僧の湯治を中心に取り上げ、五山僧の温泉入浴の事情及び湯治を巡る彼らの文学活動、悟道活動との関連を探りたい。

2. 五山僧の湯治

五山僧の湯治は、彼らの日記や作品から関連記録が見られる。例えば、中巖円月（1300—1375）の『東海一漚集』には、「熱海」という詩があり、詩句の「中宵夢破響浪浪、応是巖根湧熱湯。寛寛分泉煙繞屋、家家浴客除房」から当時熱海温泉の賑わう盛況が読み取れる。一方、義堂周信（1325—1388）の『空華日用工夫略集』には、「湯医の為、熱海に往き、温泉広濟接待庵に題す」という作があり、詩句によって、湯治のため熱海を訪れた事情を記し、熱海の湯治客で賑わい、製陶と製塩が盛んに行われる事情も見られる。

万里集九（1428—未詳）の『梅花無盡蔵』に収録される延徳3年（1491）の作品「温湯連句序」には、「本邦六十余州、毎州靈湯あり。その最たるもの、上野の草津、摂津の有馬、飛騨の湯島の三処あり」と、当時もっとも有名な温泉三カ所である草津温泉、有馬温泉、下呂温泉を指摘した。また、当時の禅僧らは温泉地において湯治しつつ、連句活動もよく行われているのがわかる。

有馬温泉は鎌倉時代設備が整っていて、公家の日記などからも湯治の記録がしばしば見られる。五山僧には、瑞溪周鳳（1391—1475）『温泉行記』は有馬温泉を訪れた記録であり、それによって、当時「湯治養生表目」という温泉の性質や効能、湯治案内などが主な内容の指南書があると掲げていた。

3. 景徐周麟、寿春妙永と「湯山聯句」

景徐周麟（1440—1518）、近江国（現在滋賀県）出身で、臨濟宗の僧であり、五山文学後期の代表作家である。文明18年（1486）から景德寺、相国寺住職、相国寺鹿苑院塔主と僧録、等持寺住職などを歴任し、老年は病身により、よく温泉に入り、特に湯山温泉（現在有馬温泉）における湯治を何度も行い、温泉地にいる同時に聯句などの文学活動をし、特に明応9年（1500）5月5日から同月23日までの間に、湯治しつつ、寿春妙永（生没年未詳）と作られた「湯山聯句」

が有名で、後に一韓智翹（生没年未詳）によって、永正元年（1504）に『湯山聯句抄』が成立した。

景徐周麟は延徳年間から「中風」、「寒疾」などの持病を抱え、明応期には、明応2年、明応4年、明応9年と三回湯山温泉（現在神戸市有馬温泉）で療養し、明応9年には「中風湯治退院」など鹿苑院から退院するに至った。その間、明応6年（1497）4月に相国寺に再住し、明応7年（1478）2月の鹿苑院入院の間の作品である「寄松井法眼書」において、「遍于公命益嚴、出司僧省之事」の記録及び、当時熊野小院竜雲寺に滞在した際に作成した「次前韻者十章寄上歳寒齋主」（第六巻）の十首目「予抱寒疾聊述卑懷」の詩題からも、起句の「衰朽畏寒如畏虎（衰朽して寒を畏ること虎を畏るの如し）」からひどい「寒疾」を抱いていたとわかる。そして、『鹿苑日録』の明応9年正月18日条には、「冷氣過甚、可必中風矣、来月入温湯、以養老身則可也」などの訴えによって、遣明正使の任命を断り、温湯による療養の事情も語っている。明応9年の湯治は、当時、彼のその病身および寺務への気力なさにもつながっている。

4. 湯治による「洗心」と悟道

景徐周麟は湯山温泉において、ただの湯治だけではなく、湯山という豊かな自然において連句するのに夢中になり、「一一胸襟流出、蓋天蓋地」（湯山連句）跋文）となった。そして、「湯山連句」の内容から見ると、「洗心泉決々、獵徳網恢々」と、温泉において、心の汚れを洗い、徳行を求めることができると語り、「作雲交市井、避暑俗塵埃」など、温泉地に身を置かれるのが、市井、俗塵などの俗世から隠遁しているように考える情趣が見られる。さらに、「湧泉菩薩水、開国葦原津」など、行基菩薩の故事を借りて、湯山温泉における禅者の悟道などの要素も取り入れていて、湯治をしつつ悟道を忘れない禅僧の本分も強調している。

5. おわりに

五山僧の作品から、彼らの湯治活動は広く行われることがわかる。そして、当時湯山（有馬）温泉における湯治について、特に景徐周麟を取り上げているが、景徐周麟は、病身により、明応年間によく湯山温泉を行い、同行者と「湯山連句」を行いつつ、温泉という臨時的隠遁地において心を洗い、悟道活動も行った。

*本論文における景徐周麟の詩文は上村観光編、景徐周麟『翰林胡蘆集』（『五山文学全集』、思文閣、一九九二年）による。